

平成二十七年 度 第一回・午前

平成二十七年二月一日実施

京華中学校 入学試験問題 国 語

一、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「あ、いいこと思いついた」

1 イツキが叫んだ。「マサル、あれ、運ばうぜ。ほら、賞品」

「賞品？ 優勝杯のことか？」

運動会は紅白二チームの対抗戦だ。全学年の全クラスのメンバーがそれぞれ紅白半分ずつに分かれて争う。誰にとってもクラ
スの半分が味方で半分が敵つてことになる。そして優勝したチームには、優勝杯が贈られる。

「そう。あれって去年の運動会が終わってから、一年間ずっと、来賓室に飾ってあるんだろ」

「あれを持ち出すのは、おれらじゃなくて、きつと先生だろう」

「でもさあ、考えてみたら、おれ、六年間一回も優勝杯ってさわったことない。マサル、お前もだろ？ じっくりさわってみた

2 いじゃん、一回くらい」

「そりやそうだけど」

3 まして、去年優勝杯を受け取ったのはマサルの大好きだった先輩だ。太田先輩。

今でもはつきり覚えている。ママが死んだあと、初めて登校した朝のことだ。

もう、落ちていたと思っていた。前の晩だって泣かずに眠れたし。そうしたら、校門に入り、職員室に挨拶に行く親父と別れ
たあとで、こんな声が聞こえたのだ。

「 a 」

一瞬、本当に、ママが自分と呼んでいると思ったのだ。たった一瞬だけだったけど。すぐに、呼ばれたのは自分じゃなくて、
近くにいた低学年の男の子で、呼んだのはその子のママだとわかったのだけだ。

4 でも、マサルはそこから動けなかった。その男の子が追いついたママに頭を小突かれ、忘れ物らしいノートを受け取られ、
昇降口へとせかされるのを、バカみたいに突っ立って見ていた。その光景がぼやけて、息が苦しくて、だから自分が涙や鼻水
でぐじゃぐじゃの顔をしているのだとわかって、ただ突っ立っていることしかできなかった。

そのとき、マサルの頭に、
「 I 」タオルがかけられた。

「 b 」

腕を引つ張られて土足のまま連れて行かれたのは、昇降口に一番近いトイレだった。背中を押されてトイレの中に入ると、う
しろでドアが開まった。

「おーい、今、このトイレ、使用禁止だから、よろしくー」

外から聞こえてきたその声で、初めて、自分を助けてくれたのが、同じクラブの太田先輩だとわかった。太田先輩は、マサル
が泣きやんで、顔を洗って、借りたタオルで
「 II 」ふいて、またみんなの前に出られるようになるまで、ずっとドアの向こ
うで番をしていてくれた。

あのタオルは、すごく汗くさかった……。

今年、マサルもイツキも白組。白組の応援団長は三組の男子だ。仲良くしている奴だし、マサルは今年も応援団員になってい
る。だから、白組が勝ったらさわらせてもらえるかもしれない。でも、それは勝てればの話だ。今年負けたら、卒業まで縁がな
いままだろう。

「だけど、イツキ、おれたちが持ち出したら怒られるぞ」

「いいからいいから。何か言われたら、その場にいない先生の名前を出して、頼まれたんだって言えば、きつと誰もそれ以上聞
かないって。みんな忙しいんだから」

まあ、いいか。

〈 ① 〉

来賓室。名前はものしいが、すわり心地の悪そうな応接セットと、つまらない記念品をつめこんだガラス張りのキャビネットがあるだけ、あとは家具も飾りもない部屋だ。壁には代々の校長先生の写真がⅢならんでいる。緑ヶ丘小学校は、歴史が古いのだ。

この部屋に生徒が入ることはほとんどない。校長室の奥で、廊下へのドアもないし。

——誰か、いるかもしれないな。

〈②〉

イツキの母ちゃんは出て行つたけど、ほかに、校長先生が相手をしなくてはいけない来賓とかが。

一応、失礼します、と声をかけてから、来賓室の中をのぞいてみた。だが、校長室と同じく、来賓室もⅣしていた。

「c」

イツキがキャビネットのガラス戸を開ける。鍵はかかっている。マサルは、中からずしりと重い金属製の記念カップを取り出した。この優勝杯は運動会の間、校長先生の席の隣に置かれている。閉会式で、勝利チームの応援団長に手渡されるまで。何の気なしに持ち上げたとき、固い音がした。カラン。中に何かあるようだ。

「なんだ？」

〈③〉

イツキものぞきこんでくる。こちらはやや小ぶりの優勝杯を持っている。準優勝チームへの——紅白二組しかないんだから、すなおに負けたほうのチームって言えばいいのに——賞品だ。

マサルの顔より大きな優勝杯の底に、きれいな青いビーズのついた箱があった。大きさは、携帯電話くらい。マサルがそつとつまみあげてみると、上蓋が開く作りになっているのがわかった。顔を寄せてきたイツキにも見えるように、蓋を開ける。

「d」

中に入っていたのは、錠剤を押し出したあとの、葉のシートだけだった。そこに書かれたカタカナを読んでみる。ニソルジピン。

なんでこんなものが、こんなところに？

〈④〉

「六年生、手の空いた者から体育館に集合！あと三十脚、椅子を運び出す！」

担任の和田先生の大声が窓から聞こえる。

5 マサルはイツキと顔を見合わせ、それぞれ腕の中の物をかかえて飛び出した。

(森谷明子『緑が丘小学校大運動会』による)

1. a d にあてはまることばとしてもつとも適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア よしよし イ まーくん！ ウ なんだこれ エ こっち来い

2. I IV にあてはまることばとしてもつとも適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア ちゃんと イ がらんと ウ ずらりと エ ばさつと

3. ———線部1に「イツキが叫んだ」とありますが、この時「イツキ」はどこにいますか。三字で抜きだしなさい。

4. ———線部2に「そりやそうだけど」とありますが、この時の「マサル」の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 優勝杯にさわってみたいと思うものの、勝手に持ち出すことにためらいを感じている。

イ 大好きな太田先輩が受け取った優勝杯なので、先生以外の誰もさわってほしくないと思っている。

ウ 優勝杯にさわられるのは優勝した応援団長だけなので、ずるをしてさわることに戸惑いを感じている。

エ 忙しい先生の代わりに優勝杯を持っていった方がいいと言う「イツキ」に反対すべきだと思っている。

5. ———線部3「今でもはつきり覚えている。ママが死んだあと、初めて登校した朝のことだ」について、つぎの(1)・(2)に答えなさい。

- (1) 「初めて登校した朝」の話の内容はどこまでですか。最後の一文をさがし、初めの五字を抜きだしなさい。
- (2) 何を「覚えている」のですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 太田先輩が自分を助けてくれた時に貸してくれたタオルが汗くさかったということ。

イ ママの死から立ち直ったと思っていたのに、実はそうではなかったということ。

ウ 太田先輩が、ママの死を思い出して泣いている自分を助けてくれたこと。

エ ママが死んだあと初めて登校した朝、偶然にも「まーくん」と呼ばれる下級生がいたこと。

6. ———線部4「でも、マサルはそこから動けなかった」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア ママが自分と呼んでいると思ったのは勘違いだとすぐに気づいたが、そのことで死んだママを思い出し、しばらく落ち着いていた気持ちがまた悲しみによって乱れている。

イ ママの声が聞こえたと思ったのはたった一瞬だけだったが、それは確かにママの声のように思われ、もう一度聞きたいと願いながら立ちすくんで待っている。

ウ 近くにいた低学年の男の子のママが忘れ物をとどけにきた光景を目にし、かつて自分も同じようなことをママにしてもらったことを思い出し、なつかしく感じている。

エ 死んだママが自分と呼んでくれるはずはないことはわかっているが、一瞬だけママの声を聞くことができたような思いになり、うれしくて胸がいっぱいになっている。

7. ———線部5「マサルはイッキと顔を見合わせ、それぞれ腕の中の物をかかえて飛び出した」について、つぎの(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「マサル」と「イッキ」が腕の中にかかえていた物をそれぞれ抜きだしなさい。

(2) 自分たちの勝手な行動をもし先生に見つかったら、「イッキ」はどうしようと考えていますか。三十字以内で答えなさい。

8. この文章における表現に関する説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 倒置法が効果的に使われることで、登場人物の性格の特徴が印象づけられている。

イ 「マサル」の視点から描かれているため、心情の変化が読者にわかりやすく伝わっている。

ウ 時間の流れ通りに記述されているため、物語の展開がわかりやすくなっている。

エ 「優勝杯」というものを通して「マサル」と「イッキ」の人物像の違いが明らかになっている。

9. この文章にはつぎの一文が抜けています。① ～ ～ ④ のどの部分に入りますか。最も適当なものをあとから選び、符号で答えなさい。

だが、ゆつくり考えているひまはなかった。

- ア ① イ ② ウ ③ エ ④

二、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

秋になると、多くの植物の葉っぱは枯れ落ちます。ところが、一年中、緑の葉っぱをつけている樹木もありま¹す。冬の寒さの中を緑の葉っぱのまま度過す樹木は、スギやマツ、モミ、ツバキやキンモクセイなどです。これらは「常緑樹」といわれます。

昔から、「これらの植物が、どうして、冬の寒さの中で緑の葉っぱのままで過ごせるのか」と、ふしぎに思われてきました。そして、昔の人々は、冬の寒さに出会っても枯れない緑のままの樹木を、「永遠の命」の象徴として、崇めてきました。

神事には、サカキの枝葉が神木として用いられます。仏様やお墓には、シキビが供えられます。サカキもシキビも常緑樹です。これらの樹木は、古来、神社やお寺に大切に植栽され、尊ばれてきました。

「歳寒の松柏」というたとえがあります。「歳寒」は「寒い冬」を意味し、「松柏」はマツと、ヒノキ科のヒノキやサワラ、コノテガシワなどの樹木を指します。これらは、いずれも常緑樹であり、寒い冬にも緑の色を変えないことから、「

」ことのたとえに使われます。マツやヒノキなどの常緑樹は、一年中、緑の葉っぱをつけていることをふしぎに思われ、敬われてきたのです。

「なぜ、一年中、常緑樹の葉っぱは緑色のままでいられるのか」と、質問してみると、多くの場合、即座に「これらの樹木は、寒さに強いから」との答えが返ってきます。

この答えは、間違いではありません。しかし、何か物足りません。その理由は、この答えが、これらの樹木が寒さに耐えるためにしている努力に触れていないからです。寒さに強い植物も、何の努力もなしに、寒さに強いわけではありません。

a、一年中、緑のままの木の葉っぱでも、暑い夏に、冬のような低い温度に出会うと、その葉っぱは低温で凍ることはありません。凍って、枯れてしまいます。b、冬の寒さにさらされている緑の葉っぱは、低温で凍ることはありません。ということは、一年中、同じ緑色のままであっても、葉っぱは、冬の寒さに向かって、耐えるための準備をしているのです。どんな準備をしているのでしょうか。

冬の寒さに耐えて生きるためには、冬に凍らない性質を身につけねばなりません。そのため、これらの葉っぱは、冬に向かって、葉っぱの中に凍らないための物質を増やします。たとえば、「糖分」です。

「糖分」というのは、甘みをもたらし成分で、「砂糖」と考えて差し支えありません。冬に向かって、葉っぱが糖分を増やす意味は、砂糖を溶かしていない水と、砂糖を溶かした砂糖水とで、どちらが凍りにくいかを考えれば、わかります。

砂糖水のほうが、凍りにくいです。c、溶けている砂糖の濃度が高くなれば高くなるほど、ますます凍らなくなります。たとえば、水は0℃で凍りますが、一五パーセントの砂糖水はマイナス1℃でも凍りません。葉っぱが含んでいる糖分の量が増えれば増えるほど、葉っぱは凍りにくくなります。「凝固点降下」という熱力学の原理です。

「凝固点降下」とは、「純粋な液体は、揮発しない物質が溶け込めば溶け込むほど、固体になる温度が低くなる」ということです。言い換えると、水の中に糖が溶け込むほど、その液の凍る温度が低くなるということです。d、糖分を増やした葉っぱは、冬の寒さでも凍らずに、緑のままでいられるのです。実際には、寒さを受けることによって、ビタミン類などの含有量が増えるので、それらの物質による凝固点降下の効果によりますます凍りにくくなります。

冬の寒さを緑のままで過ごす植物たちは、こんな原理を知って実践しているのです。外から見れば何の変化もなく、「寒さに強いから、ずっと緑色をしている」と思われがちな常緑樹の葉っぱは、じつは、寒さに耐える工夫を凝らして生きているのです。何にも努力をしないように見えて、じつは「すごい」努力家なのです。何の努力もなしに、寒い冬に、やわらかい日差しを浴びて、緑に輝くことはできないのです。

ただ、「冬の樹木の葉っぱは、糖分が増えて、ほんとうに甘くなっているのだろうか」と疑っても、葉っぱをかじって確かめな

いでください。樹木の葉っぱには、虫に食べられるのを防ぐために、有毒な物質が含まれていることが多いからです。葉っぱを食べると、もどしたり、下痢をしたりすることがあります。ひどい場合には、めまいや意識を失う中毒症状が現れるかもしれません。

「寒さに耐えるために、葉っぱの中に糖分を増やす」というしくみは、冬の寒さに耐える多くの植物に共通のものです。ですから、野菜で確かめることができます。たとえば、冬の寒さを通り越したダイコンやハクサイ、キャベツなどは、「甘い」といわれます。糖分が増えて、甘みが増しているのです。

コマツナは、アブラナ科の代表的な緑黄色野菜で、ホウレンソウ、シュンギクとともに、「非結球性の三大青菜」の一つです。江戸時代、江戸の小松川（現在の東京都江戸川区）で栽培されていたので、「コマツナ（小松菜）」と名づけられました。ウグイ

スがさえずるところから出まわり、色もウグイス色と似ていることから、「ウグイスナ」の別名があります。
冬に出荷されるものは、温室で栽培されたものです。「寒じめホウレンソウ」と同じように、出荷前に、わざわざ一定期間、温室の中に冬の寒風が吹き入れられ、寒さにさらされます。それによって、甘みが増えます。それが、「寒じめコマツナ」とよばれるものです。

「雪下ニンジン」とよばれるニンジンが、早春に出荷されます。これは、秋に収穫されずに、冬の寒い間、雪の下に埋められ過ぎてきたニンジンです。とても甘く、糖度は、ふつうのニンジンの二倍にもなるといわれます。

果物でも、温州ミカンなどは、冬の寒さに出会うと甘くなります。「完熟ミカン」とよばれるのは、冬の寒さを体感したミカンで、糖分が高くなっています。

緑の葉っぱで冬の寒さに耐える植物だけでなく、食用部が地中にあるダイコンやニンジンでも、また、果実までも、同じくみて、冬の寒さをしのいでいるのです。冬の寒さに出会うねばならない地域に生きる植物たちは、冬の寒さをしのぐための術を心得ているのです。

(田中修『植物はすごい』による)

1. にあてはまることばとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア そして イ たとえば ウ しかし エ だから

2. にあてはまることばとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人の助言も聞き入れることが一切ないほど頑固である
イ 人間の力ではとうてい及ばない神秘的な力を持つ
ウ 周りの様子もわからなくなるほど自分のことではいっぱいになる
エ どんなに苦しいときでも、信念を貫き通す

3. 線部 1 「一年中、緑の葉っぱをつけている樹木」について、つぎの(1)・(2)に答えなさい。

(1) つぎの文章は「一年中、緑の葉っぱをつけている樹木」についての説明です。(1) () (2) () にあてはまることばをそれぞれ指定字数で抜きだしなさい。

一年中、緑の葉っぱをつけている樹木は (1) 三字 () といわれます。昔から (2) 九字 () と考えられ、
(3) 五字 () に植えられて尊ばれてきました。

(2) 「一年中、緑の葉っぱをつけている樹木」でも、冬に葉っぱが凍って枯れてしまうことがあります。どのようなときですか。解答欄にあてはまるように十八字で抜きだしなさい。

4. 線部 2 「これらの樹木が寒さに耐えるためにしている努力」について、つぎの(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「これらの樹木が寒さに耐えるためにしている努力」とはどのようなことですか。三十字以内で答えなさい。
(2) つぎの文章は、このような「努力」をした樹木が得られる効果についての説明です。(1) () (2) () にあてはまることばをそれぞれ五字で抜きだしなさい。

寒さに耐えるための努力をした樹木は、冬でも緑の葉っぱを保つことができます。そして、寒さを受けることで
(1) () などの量を増やし、 (2) () という効果により、ますます凍りにくくなります。

5. 線部 3 「努力家」とは何を指していますか。七字で抜きだしなさい。

6. ——— 線部 4 に「『寒さに耐えるために、葉っぱの中に糖分を増やす』というしくみは、……共通のものです」とありますが、「ホウレンソウ」や「コマツナ」に共通する「糖分を増やす」ための工夫はどのようなことをすることですか。二十字以内で答えなさい。

7. 本文の内容の説明として最も適当なものを選び、その符号で答えなさい。

ア スギやマツなどの葉っぱが一年中緑色なのは冬の寒さに強いからだ、と考えるのは間違いである。
 イ 常緑樹の葉っぱや野菜には、虫に食べられるのを防ぐために有毒な物質が必ず含まれている。
 ウ 冬の寒さに耐える多くの植物は、葉っぱに糖分を増やすという共通のしくみを備えている。
 エ 食用部が地中にあるダイコンやニンジンも、葉っぱに糖分を蓄えて冬の寒さをしのいでいる。

三、つぎの①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- | | | |
|------------|-------------|------------|
| ① 郷里に帰る。 | ② 目印を付けておく。 | ③ 川の源をさがす。 |
| ④ 危険を察知する。 | ⑤ 力を十分発揮する。 | |

四、つぎの①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| ① 空が夕日にソまる。 | ② コップがワれる。 | ③ ウラニワに花を植える。 |
| ④ 親のチュウコクに従う。 | ⑤ カンタンなミスをする。 | |

[illegible]